

流大と若き仲間たち

—卒業生や留学生のことなど—

百合本 茂

流大に在職して40年が経過した。この3月で定年を迎える。経済学部に23年、2002年の大学院物流情報学研究科博士後期課程開設に伴い、流通情報学部に移籍して17年、多くの教職員の方々にお世話になり、大過なく過ごさせていただいた。この間、講義やゼミ等で関わってきた多くの学生が卒業し、社会人として巣立っていった。

初めて担当した経済学部の専門ゼミの卒業生は、80年度卒の13期生。昨年10月に彼らの還暦同期会が竜ヶ崎キャンパスで開かれ、何十年ぶりかのゼミ生の顔もあり、再会を喜んだ。14期生の何人かとは毎年夏と冬の2回、神田で酒を酌み交わしている。また、流大卒業生で唯一仲人をしたのも14期生。15期生の中には、茨城県に本社を持つ中堅企業の経営者になったゼミ生がいて、昨年、新松戸の研究室に顔を見せてくれた。16期生と21期生には、流大職員として中軸になって頑張っているゼミ生がいる。彼らに続き、すでに40歳、50歳を超えたゼミ生との交流が今もあり、結婚披露宴に招待されたり、地元産の果物などを送っていただいたり、また、年賀状での付き合いのある卒業生も多い。当時のゼミでは、今とは異なり、スマホなどによる連絡手段が無かったことや個人情報保護法が無かったこともあって、電話や住所の書かれたゼミ名簿が当然のように作られていた。

それ以降の世代になると、名簿の作成は行われなくなり、お互いの連絡はメールによるのがあたりまえになってきた。また、パソコンなど情報機器の普及により、学生が手書きの文章を作ることが少なくなり、年賀状を書くなどということもめっきり減ってきた。従って、そのような時代を共に過ごし、かつ、年齢差も広がってきた流通情報学部のゼミ生とは、卒業後は、残念ながらその関係が希薄になってきている。例外は、留学生である。流通情報学部は他学部に比べ多くの留学生を抱え、アジアからの学生が数多く在籍している。始めは韓国や台湾からの学生が多かったが、ある頃から中国が圧倒的

に多くなり、現在では、ベトナムがそれに並ぶほどで、その他の東南アジアからの学生が少々という所である。彼ら留学生とは、卒業後もそれなりに関係が続いており、彼らの国を旅行などで訪れたときに再会したり、結婚した家族の写真をメールで送って来てくれたりすることもある。

流通情報学部では、このように多くの留学生を抱えており、日本人学生にとっても異文化を知る良い機会になるものと考えられる。実現はしなかったが、ゼミ学生の交流プログラムをもつことはできないか、もう10年以上も前に構想したことがある。学生は第二外国語を学ぶ機会があるが、中でも中国語を選択するものが最も多い。そこで、中国語を選択した日本人学生と中国人留学生が同数ずついるゼミを作り、日中の学生がともにお互いの言語の習得や、文化の相違などを理解したり教えたりする機会を作つたらいいのではと考えた。また、夏休みなどの長期休暇には、流大の協定校である北京物資学院や首都経済貿易大学などに短期留学、希望する学生は1年間の長期留学をするのもいい。

近年、日本と中国や韓国との外交関係は、必ずしも良好とは言えない。書店に行けば、嫌中、嫌韓本も並んでいる時代である。一方で、観光や留学・就労目的で来日する中・韓をはじめとする外国人の数は増加し続けている。反面、我が国の学生の指向は、一部を除きどんどん内向きになり、海外への関心が薄れてきている。スマホや仲間内だけの関係に満足して学生生活を過ごす場合も多い。異文化交流の必要性が叫ばれている今日ではあるが、言葉どおり進んでいるとは言い難い。同じゼミに外国人がいても、それぞれが打ち解けることなく、名前すら覚えようとしないという寂しいケースもある。本学部にとって、この点はいささか由々しき問題でもある。そのようなこともあり、まずは、ゼミにおいて、留学生の中でも最多を占めている中国人学生との交流プログラムを作ることができれば、草の根交流も進み、さらには日中友好にも役に立つだろうし、その流れが他の国から来た留学生との関係にも発展していくのではと愚考した次第である。

ともすると、〇〇ファーストなどと、極端な自国第一主義の流れすら見える国際情勢の中で、学生時代から外国人に自然な形で接し交流を進めていくことは、お互いの多様性を尊重し、相互理解を深め、ひいては他国との共存や国際協調への有効なステップとなるのではないだろうか。これからの流大生が、内にこもることなく、国境を意識せず巡り歩き、世界で活躍していく人材となることを願っている。